

## 関係性の持ち方と解離傾向の関連

——正常解離の下位機能における性差に関する基礎研究——

池田 龍也<sup>1</sup>・岡本 祐子<sup>1</sup>

Relationship between Relationship Style and Dissociation Tendency

Tatsuya Ikeda<sup>1</sup> and Yuko Okamoto<sup>1</sup>

In this study, we discuss the relationship between relationship style and dissociation tendency. We call this relationship the “R-D relation”. The participants were 411 healthy undergraduates (131 males and 280 females) in Kyoto. Their relationship style and dissociation tendency were measured with a self-report questionnaire. Structural equal modeling indicated that the R-D relation is a good model and relationship style is a very strong predictor for dissociation tendency ( $\beta = -.871$ ). Multiple regression analyses indicated that the R-D relation pattern differs by gender. In the case of males, the interpersonal relationship factor does not have a significant effect on dissociation tendency. However, in the case of females, this factor has significant effects on dissociation tendency (inattention and occupation). One of the most important points in this study is the relationship between relationship style and dissociation tendency and whether this differs by gender. Our data suggest that necessary dissociative strategies are used in different ways by males and females; accordingly our data suggest that possible dissociation has different meanings for each gender.

### 問題・目的

現代の解離現象は、心的機能間の不統合であると理解されている。解離は臨床群・非臨床群双方にみとめられる精神現象であり、病理に繋がる解離を病的解離と呼び、病理とのつながりのないものを正常解離と呼ぶ(Putnam, 1997 中井訳 2001)。これまでの研究において、病的解離の原因として最も有力であると考えられてきたのは、心的外傷体験である。解離研究は解離性同一性障害(Dissociative Identity Disorder; 以下, DID)や全生活史健忘など、解離性障害の中でも比較的珍しいものを対象としたものが多い。更に統合失調症や境界性人格障害など他の疾患にみられる解離症状との相違を検討するものも多いが、解離的な構えや軽い解離を検討したものは少ない。これは臨床心

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科 (Graduates School of Education, Hiroshima University)

理学が目の前の個人を援助するための知識・技術体系のためであると推測される。確かに、解離の中でも正常解離を研究することは対人援助に直結するようには見えないかもしれない。しかし Roesler, & McKenzie(1994)も指摘しているように、現在の解離理論は基礎研究が盤石でなく、臨床事例に多くを負っている。そのような現状の中で、珍しい解離にのみ着目され続けていることは、研究と現実が乖離していると言わざるを得ない。その臨床事例の妥当性を示すためにも正常解離に関する基礎研究を行う必要性は大きい。そこで本研究では、正常解離の下位機能を検討する。

**性差のギャップ** 解離とは“意識・記憶・同一性・知覚・運動(随意)・感情などの通常は統合されている心的機能(やその情報)の統合性の喪失”(田辺, 2002, p.162)であり、DSM-IV-TR(American Psychiatric Association, 2000 高橋・大野・染矢訳 2004)では解離性障害として解離性健忘・解離性遁走・DID・離人症性障害・特定不能の解離性障害という5つの下位分類が挙げられている。また解離性障害の有病率には性差があり、一般的に女性は男性よりも高い有病率を持つとされている(Putnam, 1997 中井訳 2001)。この男女差は概ね、他の文化圏に於いても同様である(Nijenhuis, Spinhoven, Dyck, Van der Hart, & Vanderlinden, 1996; Friedl, & Draijer, 2000; Brand, Armstrong, Loewenstein, & McNary, 2009)。しかし一方で、非臨床群における解離傾向の高低に性差は報告されておらず、男女で同等の解離傾向を持つとされている(田辺, 1994)。この解離傾向と解離性障害に於ける性差のギャップについては2つの理解が可能である。

1つは解離傾向そのものに男女差がないものの、DIDをはじめとする解離性障害を発現する過程に於いて性差が表れる可能性である。もう1つは本来性差のギャップは存在せず、調査段階のサンプルの偏りによって解離性障害に女性が多いという結果が導かれた可能性である。前者の場合、女性の方が性的虐待の被害者となりやすいことをはじめとする、女性が経験しやすい事象が病的解離の展開へ寄与していると理解される。一方後者の場合、女性の方が医療機関へ通いやすい傾向があるためであり(Tutkun, Şar, Yargıç, Özpulat, Yanık, & Kiziltan, 1998)、男性は司法矯正機関に收容されている可能性があるとされている(Putnam, 1997, 中井訳 2001)。現在では後者の可能性が有力視されているようであり、解離性障害が女性に多いという報告はサンプリングの問題によるものとみなされつつある。確かに、刑務所に收容されたDID患者を対象としたLewis, Yeager, Swica, Pincus, & Lewis(1997)の報告によると、全12名の内、男性11名と男性が多く、男性が司法矯正機関に收容されやすいという可能性を支持しているようである。しかしPutnam(1997, 中井訳 2001)も述べているように男性の解離については不明な点が多く、なぜ男性のDIDが刑務所に收容されるような過剰な攻撃性を帯びるのかも不明瞭である。

**連続と不連続** Janet, P.が臨床群と非臨床群の解離は不連続的であるとする解離理論を提唱しているのに対し(中谷, 2000)、Hilgard(1986)は、解離が本来ヒトに備わった適応的機制であるとして解離の適応性を強調する新解離理論を提唱した。病的な解離は新解離理論の中で、本来適応的であるはずの解離が過剰に用いられる事によって生じるとされている(田辺, 1994)。またBernstein, & Putnam(1986)は、非病的で健康者にもみとめられるような解離(以下、正常解離)と病的解離の間に連続性を仮定して解離体験尺度(Dissociative Experience Scale: 以下, DES)を開発している。このように解離研究を概観すると、Janet, P.の解離理論をはじめとする類型学モデルと、Hilgard(1986)の新解

離理論をはじめとする連続体モデルという2つの相反するアプローチが存在する。しかし舛田(2006)も指摘しているように、類型学モデルによって病的解離の特異性を認識しつつも、連続体モデルによって正常な解離との連続性を視野に入れる事は、臨床においても解離研究においても非常に重要である。

**病的解離** 以上のように、病的解離は現在までに多くの研究者によって研究されてきた。近年では Simeon, Guralnik, Knutelska, & Schmeidler (2002)が解離性障害患者のパーソナリティを研究し、危機回避的気質と未熟な防衛に特徴づけられる事を明らかにした。そのような気質や防衛は解離性障害患者の無力さや無力感に起因するものと思われる。異常解離は幼少期における身体的・性的な外傷体験によって生ずるとされるが、そのような外傷体験の多くは子供自身の対処能力を大きく上回るものである事が予想される。そのような個人の処理能力を大きく上回る圧倒的経験は、体験する者の無力さや無力感を惹起あるいは強化するものと考えられる。更に人生初期におけるそのような体験は自己の無力感を惹起するだけではなく、基本的な対人関係の構築にも重大な影響を与える事が予想されている (Teicher, Samson, Polcari, & McGrenery, 2006)。また Sierra, Senior, Dalton, McDonough, Bond, Phillips, O'Dwyer, & David (2002)は、解離性障害の1つである離人症患者を対象とした実験を行い、離人症患者が無害な刺激に対する反応が遅い、つまり無害な刺激に対する低い感受性を持つ事を明らかにした。この無害な刺激に対する低い感受性は、有害な刺激に対して選択的に注意を払っているために他の無害な刺激への感受性が低下している可能性が指摘されている (Sierra et al., 2002)。このような高い警戒状態は、上述のネガティブな対人関係モデルによって生じていると思われる。また Simeon, Guralnik, Sirof, & Knutelska (2001)も対人関係上の問題は全て解離に関連していると指摘しており、関係性が解離へと影響を及ぼすことが予想される。

**正常解離** 臨床群と非臨床群を対象とした調査では、解離が未熟で回避的な対処方略であることは病的解離・正常解離双方に共通した特徴であることが明らかになっている (Mattim, Pirkko, & Viikko, 1999)。しかしまだ正常解離を中心とした研究は少ない。これは解離を含めた臨床心理学的現象の多くが臨床知見に依拠しているためであると考えられる。現在の正常解離現象の多くは、異常解離の臨床知見によって推察されたものであると言えよう。解離の適応的側面として Ludwig (1983)は自動化・カタルシス・労力の経済的効果的利用など7つ挙げ、DESの開発者である Putnam (1997, 中井訳 2001)は没頭する事を解離の中の適応的側面であるとしている。

中村(2003)は解離性障害のスクリーニング・テストに用いられる DES の有用性を評価しつつも、質問項目の叙述文が開発者らの臨床体験に基づくものであり解離の正常な側面を測定しているのか疑問であるとして、解離の正常な側面を測定する日常的解離尺度(Daily Dissociation Scale : 以下, DDS)を開発した。舛田・中村(2005)は、日常的解離を「意識・記憶・同一性等の遮断・喪失が一時的・限定的なもの。本人にその自覚があり、それらの体験から自分の意志である程度戻ることができる統制性のある解離」であると操作的定義をしている。この日常的解離は、解離の正常な側面を最も表していると考えられる。また舛田(2008)は日常的解離尺度に因子分析を施し4つの下位因子を得て、その下位因子の1つである一過性健忘が対人関係場面でのレジリエンスを抑制し、空想性・感情切り替え・没頭性が対人関係場面でのレジリエンスを強化する事を明らかにした。これは解離

の下位機能が関係性の次元で異なる機能を持つ可能性を示唆している。更に非臨床群の大学生を対象とした Giesbrecht, Smeets, Merckelbach, & Jelicic(2007)でも没頭と離人/非現実感ではストレスナーへの反応が異なることが示されており、没頭ではストレスの指標であるコルチゾール値が低減するが、離人/非現実感では逆にコルチゾール値が増加したと報告している。これらの知見から、解離は異なる役割を持った下位機能を有す可能性が示唆される。しかし解離の下位機能について検討している研究は少なく、解離の正常-病理のつながりを明らかにするためにも解離の下位機能を検討する必要は大きい。

**関係性と解離** 解離はこれまで、病的状態であると捉えられてきた。しかし野口(2007)も指摘しているように特殊で病的な状態像としてではなく、解離をその者自身のあり方や内界・外界との関係性の持ち方、あるいはパーソナリティとして捉え直す必要がある。近年、「プチ解離」と呼ばれる弱い解離が報告されている(兼本・多羅尾, 2007; 岩宮, 2009)。プチ解離とは解離スペクトラムの中でも比較的浅い場所に位置し、解離している場面と解離していない場面が明瞭でなく、人格と呼べるほどのまとまりを持ったものを独力で生成するわけではないような解離である(兼本・多羅尾, 2007)。このようなプチ解離は記憶や人格の解離という、病的解離というよりもむしろ解離的な構えやあり方、パーソナリティとして捉える方が妥当であろう。このような解離的構えを検討するためには、関係性という次元を除いて考察することはできない。

精神力動論において、外界・内界との関係を結ぶ上で重要な装置は自我である(福島, 1989)。自我には自我機能と呼ばれるエス・外界・超自我の3つを調整する機能があり、自我機能は自身の内界・外界や自・他との関係性の様式を表している事が予測される。この自我機能を体系的に研究したのが Bellak, L.である(馬場・鈴木・竹内・松本・長谷川, 2000)。Bellak, Hurvich, & Gediman(1973)は自我機能として12の機能を挙げ、目録法・投影法・面接法による自我機能測定のための測度を開発した。また Bellak et al.(1973)は統合失調症患者・神経症患者・健康者の自我機能を測定して病態ごとにその自我機能が異なる事を明らかにした。中西・古市(1981)は Bellak et al.(1973)の自我機能測度の内、面接法によるものを尺度化し、日本向けに標準化した自我機能調査票-2(Ego Function Inventory 2: EFI-2)を作成した。中西・古市(1981)によると EFI-2 は Bellak et al.(1973)のものとは異なり、病的な自我機能から健康者の自我機能まで幅広く測定できるとしている。

Bellak et al.(1973)が想定した12の自我機能の中でも、特に内外との関係性の様式と密接に結びついている自我機能は、現実感覚(Reality Sense: 以下, RS)・対象関係(Object Relation: 以下, OR)・刺激障壁(Stimulus Barrier: 以下, SB)・現実検討(Reality Testing: 以下, RT)の4つが挙げられる。RSは解離との関係が深く自他の区別や自我境界の明瞭さ、同一性を示し(Bellak et al., 1973), ORは大山(2003)の言うように対人関係の円滑さを示している。またSBは母子関係から影響を受ける因子であり、内・外の刺激に対する感受性を示す(Bellak et al., 1973)。RTは現実と空想を区別する能力であり、これが著しく障害されると精神病的な様相を呈するとされる(Bellak et al., 1973)。Bellak et al.(1973)によると、RSとRTは従来同一の機能として扱われていたが受動的・自動的機能が能動的機能であるかという点で区別された。RSは自動的に機能し、これが低下すると健忘や遁走のような現象が生じる。生活場面では入眠時に生じる感覚がRSの低減に起因するとされる。一方、RTは能

動的機能であり注意が払われる事で機能する(Bellak et al., 1973)。

関係性という観点から解離を捉える試みは少ないが、皆無ではない。例えば、Federn, P.は Tausk, V.の提唱した自我境界概念を用いて自我とエスの境界である内的自我境界が高い非透過性を得た結果として離人症状が現れるとしている(Landis, 1970 馬場・小出訳 1981)。他にも木村(1978; 2006)は自と他の「あいだ」に着目し、人がその「あいだ」でどのように振る舞うかによってアンテ・フェストゥム、イントラ・フェストゥム、ポスト・フェストゥムという3つの構造に分類し、離人症は自・他双方との繋がりを喪失したイントラ・フェストゥム構造にあてはまるとしている。更に松下(2000)は木村(1978)の存在構造論に基づいて離人感尺度を開発し、自己指向性が青年期の離人感全体に関係している事を明らかにした。

このように解離を「関係性」として捉えた研究はまだ少ない。DIDの主たる原因として想定されてきた性的虐待やトラウマを伴わないDIDの存在も報告されており(細澤, 2001; 岡野, 2007), 従来のような「外傷体験を伴う異常解離」と「外傷体験を伴わない正常解離」のように二分することは実際的ではない。また解離の下位機能が関係性の次元に及ぼす影響が指摘されていること(Giesbrecht, Smeets, Merckelbach, & Jelicic, 2007; 舛田, 2008)や、解離の性差にみとめられるギャップなどを鑑みると、解離の下位機能を関係性の観点から検討する必要がある。そこで本研究は(a)関係性の持ち方が解離傾向と密接な関係を持つ事を明らかにし、(b)解離の下位機能によって性差がみとめられるか否かを検討する事を目的とし、以下の2つの仮説を検討する。

1. 関係性の持ち方が解離傾向に関連しており、希薄な(回避的な)関係性の持ち方は高い解離傾向と関連している。
2. 男女で解離の下位機能に相違があり、これも関係性の持ち方に関連している。

## 方法

### 調査方法

**調査協力者** 近畿地方の私立A大学の学生437名(男性140名：女性296名：性別不明1名) 平均年齢19.30歳( $SD=3.92$ )。

**期間** 2010年6月14日—同年7月16日。

**手続き** 講義開始前あるいは終了直後に、無記名方式の質問紙を配布・回収した。回答にあたり、調査協力は任意である事、調査協力の可否に関わらず協力者には一切の利害は発生しない事、何らかの不都合が生じた場合は回答を中断・放棄しても構わない事、回収したデータは統計的に処理されるため、個人が特定されるような形で公開しない旨を口頭で伝えた。その上で調査協力を求め、同意する場合は質問項目に回答し、提出するよう求めた。また、その場で提出できない場合は調査期間中に、別途設置した回収箱に入れるよう依頼した。回答に所要する時間は10分程度であった。

### 尺度

**尺度構成** フェイスシート、日常的解離尺度16項目版(中村, 2003)、自我機能調査票2(中西・古市, 1981)。

1. フェイスシート：依頼書を兼ねており、調査概要・調査への協力は任意のものである事・結果

は統計的に処理される事を明記した。また、依頼文の下部に指導教員氏名、調査者氏名、連絡先などを記載し、フェイスシート下部に年齢・性別を回答する欄を設けた。

2. 日常的解離尺度 16 項目版(Daily Dissociation Scale 16 : 以下, DDS16) : 中村(2003)によって開発された全 16 項目からなる, 正常解離傾向を測定するための尺度(Table1)。パトナムらの解離体験尺度(DES)は開発者らの臨床知見に基づいており, 解離の正常性を正確に測定できているとは言い難いとして開発された。回答は「1.非常によくあてはまる」から「5.まったくあてはまらない」までの五件法で行った。

3. 自我機能調査票 2(Ego Function Inventory 2 : 以下, EFI-2) : 中西・古市(1981)によって開発された自我機能を測定する尺度(Table2)。Bellak et al.(1973)の開発した自我機能測定尺度の内, 面接法による測定を背景に持つ。Bellak et al.(1973)の測度とは異なり, 健常者から精神病者まで幅広く適用が可能であるとされる。本研究では全 9 因子の内, 現実感覚・対象関係・刺激障壁・現実検討の 4 因子 32 項目と虚偽尺度 4 項目を用いた。回答は変則六件法によって行い「1.非常によくあてはまる」から「5.まったくあてはまらない」までと, 項目番号に×印を記入する事を「よくわからない」とした。「よくわからない」という回答の得点は 3 と等価とした。

**有効回答の選定** 欠損値が全 52 項目中 15 項目以上の者, フェイスシート未記入者, EFI-2 に含まれる虚偽尺度得点 15 点以上の者。以上 3 つの条件の内 1 つ以上を満たす者のデータを分析対象から除外した。なお, 多重回答(1 項目に 2 つ以上の回答)については, 欠損値として処理した。その結果, 有効回答者は 411 名(男性 131 名 : 女性 280 名), 有効回答率 94%, 平均年齢 19.43 歳( $SD=3.49$ )であった。

## 群の作成

**日常的解離尺度低得点群と日常的解離尺度高得点群の選定** 正常解離傾向の高い者と低い者を比較するために, DDS16 得点を基準にした群を作成した。DDS16 の平均値を算出し, DDS16 得点がこの値未満の者を日常的解離尺度低得点群(以下, DDS-L 群), 平均値以上の者を日常的解離尺度高得点群(以下, DDS-H 群)に分類した。DDS-L 群は, 211 名(男性 80 : 女性 131) 平均年齢 19.44 歳( $SD=3.31$ ) DDS16 平均得点 39.68( $SD=5.91$ )であった。一方で DDS-H 群は, 200 名(男性 51 : 女性 149) 平均年齢 19.43 歳( $SD=3.68$ ) DDS16 平均得点 55.45( $SD=6.02$ )であった。

**性別群の作成** 性別による検討を行うために, 性別群を作成した。男性群( $n=131$  平均年齢 19.27( $SD=2.11$ ))の DDS16 平均得点は 45.77( $SD=9.32$ ), 女性群( $n=280$  平均年齢 19.51( $SD=3.98$ ))の DDS16 平均得点は 48.09( $SD=10.07$ )であった。

## 解析手法

得られたデータは以下の手順で分析した。有効回答者の欠損値を各質問項目の平均得点によって補完した上で, (a) 各尺度の確認的因子分析・探索的因子分析・信頼性係数の算出によって使用尺度について検討した。(b)男性群, 女性群の記述統計量を算出した。(c)DDS16 下位尺度の潜在変数として正常解離傾向, EFI-2 下位因子の潜在変数として関係性の持ち方(以下, 関係性傾向)を想定し, 共分散構造分析によって正常解離傾向から関係性傾向への影響を検討した。(d)DDS16 得点の高低と性別(男女)により  $\chi^2$  検定を行い, 各グループに分類された人数の差を検討した。(e)男女別で, DDS16

下位因子を目的変数、EFI-2 下位因子を説明変数とした重回帰分析により、解離における性差を検討した。

## 結果

**DDS16 について** DDS16 因子構造を把握するために因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。『因子負荷量.30 以上』かつ『複数の因子に負荷量.30 以上の負荷がない』ものを各因子に含まれる項目を選択したところ、item9 と item13 が因子に含まれる項目からは除外された。更にここで得られた因子構造を確認するため、共分散構造分析により確認的因子分析を行ったところ良好な適合度( $\chi^2(71)=147.33$ ,  $p<.01$ , GFI=.951, AGIF=.928, RMSEA=.051, AIC=187.33)が得られたため、この因子構造が DDS16 の因子構造として採用された。それぞれ「注意散漫」・「一過性健忘」・「没頭性」・「空想性」と命名された。更に信頼性を検討するために  $\alpha$  係数を算出したところ、尺度全体の信頼性は  $\alpha=.766$  であった。因子構造および因子間相関、各因子の信頼性を Table1 に示す。

**EFI-2 について** 中西・古市(1981)の EFI-2 因子構造を確認するため、共分散構造分析を用いて確認的因子分析を行い、モデル適合度を算出した( $\chi^2(464)=2011.7$ ,  $p<.01$ , GFI=.754, AGIF=.720, RMSEA=.090, AIC=2075.724)。次に EFI-2 を最尤法・プロマックス回転によって因子分析を行い、『因子負荷量.30 以上』かつ『複数の因子に負荷量.30 以上の負荷がない』ものを各因子に含まれる項目を選択した。その結果、スクリープロットおよび因子負荷行列から 5 因子解が妥当であると判断された。また item1, item13, item15, item19, item21, item29, item34, item35 が因子に含まれる項目から除外された。因子分析によって得られた因子構造が妥当であるかを検討するために再び、共分散構造分析を用いて確認的因子分析を行い、モデル適合度の指標を算出した( $\chi^2(220)=636.93$ ,  $p<.01$ , GFI=.889, AGIF=.861, RMSEA=.068, AIC=702.93)。モデル適合度の指標を比較し、後者の因子構造がより妥当であると判断されたため、後者の因子構造が EFI-2 の因子構造として採用された。それぞれ「現実感覚」・「被影響性」・「対人関係」・「刺激障壁」・「現実検討」と命名された。更に信頼性を検討するために  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha=.900$  であった。因子構造および因子間相関、各因子の信頼性を Table2 に示す。

**関係性-解離傾向モデルの検討** 関係性が解離傾向に影響を及ぼす程度を明らかにするために、共分散構造分析を行い、得られた標準化済み  $\beta$  係数を用いてパス図を作成した(Fig. 1)。同時にモデル適合度も求めた( $\chi^2(155.73)=26$ ,  $p<.01$ , GFI=.922, AGFI=.866, RMSEA=.110)。

**解離傾向の高低と男女差の比率についての検討** DDS16 得点の高低と性別による人数の差を検討するために、クロス集計表を作成し(Table3),  $\chi^2$  乗検定を行ったところ有意な差がみとめられた( $\chi^2(1)=7.288$ ,  $p<.01$ )。

**男女別の DDS16 及び EFI-2 下位因子の記述統計量の算出** 男女別に解離傾向と関係性の検討を行うために、男女別に DDS16 及び EFI-2 下位因子の記述統計量を算出した(Table4)。

**男女別の重回帰分析** 性別による関係性の持ち方と正常解離傾向の関連の特徴を明らかにするために、EFI-2 下位因子を説明変数、DDS16 得点を目的変数とした重回帰分析を行った。変数投入

Table1  
DDS16の因子分析(最尤法・プロマックス回転)

因子名( $\alpha$ )	factor			
	f1	f2	f3	f4
注意散漫( $\alpha=.655$ )				
15 大事な行事の時に、腹痛や熱で休むことがある	<b>.631</b>	-.160	.101	.007
8 職場、学校の住所を書く欄に、自宅の住所をいつのまにか書いてしまったことがある	<b>.568</b>	-.078	-.026	.000
16 大事なものを、うっかり手が滑って落としてしまうことがある	<b>.533</b>	.100	.040	-.099
6 寝てもいないのにうっかり電車を降り忘れ、次の駅に行くことがある	<b>.468</b>	.105	-.151	-.003
14 場面により自分の名前を使い分ける	<b>.441</b>	-.164	.227	-.010
7 傘や荷物をどこかに忘れることがある	<b>.379</b>	.274	-.249	-.077
一過性健忘( $\alpha=.617$ )				
3 他の人が難しい話をしているとき、上の空で聞いていることがある	-.134	<b>.652</b>	.020	.015
5 たった今会ってしゃべったばかりの人の服装や髪形をまったく覚えていない	-.086	<b>.518</b>	.096	.000
4 友だちや教師や他の大切な人々名前をど忘れしたことがある	.069	<b>.447</b>	.046	-.010
12 先週言ったことと反対のことを言うことがある	.235	<b>.372</b>	.076	.068
没頭性( $\alpha=.568$ )				
1 ゲームをしているときはいつもと違う性格になる	.001	.034	<b>.697</b>	-.029
2 テレビを見たりゲームで遊んだりし終わると、その周りで何が起っていたのかわからない	-.008	.272	<b>.482</b>	-.027
空想性( $\alpha=.503$ )				
10 本当の自分は今のような性格ではない	-.037	-.064	-.036	<b>.740</b>
11 今までと違う別の自分になってみたいという願望を持っている	-.028	.130	-.031	<b>.469</b>
因子得点には含まない				
13 身内にはわがままだが、外では好人物で通っている	.288	-.021	.055	.237
9 車を運転したり電車に乗っているとき、途中の経路を全く意識しない内に到着することがある	.269	.205	.042	.155
	f1	.580	.280	.250
	f2		.290	.260
	f3			.410

太字は因子負荷量.30以上、斜体は因子得点に含まない項目を示す。

法はステップワイズ法によって行われた(Table5)。重回帰分析の結果を用い、有意な $\beta$ 係数がみとめられたもののみによって男女別にパス図を作成した(Fig.2, Fig.3)。

## 考察

### 日常的解離の構造について



Table2  
EFI-2の因子分析(最尤法・プロマックス回転)

因子名( $\alpha$ )	factor				
	f1	f2	f3	f4	f5
<b>現実感覚(<math>\alpha=.771</math>)</b>					
28 科学的に説明できない不思議な音をきいたことがある。	<b>.822</b>	-.136	-.003	-.067	-.170
32 実際にいるはずがないのに、他の人間がいるのを見たことがある。	<b>.729</b>	.046	-.048	.007	-.074
20 幻覚を見たり聞いたりしたことがある。	<b>.663</b>	.004	-.022	-.018	.095
24 錯覚をおこしたことがある。	<b>.601</b>	-.122	-.028	.069	.164
16 たとえ周囲の人すべてが異を唱えても、自分はこれは現実のことだと確信したことがある。	<b>.422</b>	-.043	-.055	.109	-.008
31 ちょっとした病気でもすぐに寝こんでしまう。	<b>.367</b>	-.040	-.028	.273	-.068
25 自分の目の前にあるものが、ひょっとしたら本当は存在していないのではないかと感じたことがある。	<b>.354</b>	-.015	.060	-.015	.351
36 自分の要求や願望によって現実を歪めて見ることもある。	<b>.332</b>	.133	-.035	.206	.040
<b>被影響性(<math>\alpha=.717</math>)</b>					
30 他の者から見すてられ、のけものにされているような気がする。	.101	<b>.778</b>	.046	-.041	-.203
22 他人とつきあっているとき、とにかく自分の心が傷つけられやすい。	-.088	<b>.727</b>	.054	.192	-.111
33 誰かにお前は駄目だといわれると、本当に自分は駄目な人間であるような気がする。	-.237	<b>.526</b>	-.094	.340	.010
5 自分という存在に実感がもてない。	-.171	<b>.463</b>	.225	-.053	.290
18 常にみんなの注意が自分に向いていないと不満である。	.024	<b>.446</b>	-.236	.049	-.020
<b>対人関係(<math>\alpha=.702</math>)</b>					
6 多くの人と親しくなるのは、あまり好きではない。	-.130	-.110	<b>.730</b>	.074	.067
26 自分には、多くの知り合いや友人がいる。	-.102	.046	<b>.668</b>	-.020	-.090
10 おおぜいの者と一緒にいるよりも、ひとりでいるほうが好きである。	.130	-.139	<b>.653</b>	-.011	-.018
2 互いに信頼し、助けあえる友人がいる	-.064	.082	<b>.495</b>	-.046	-.010
<b>刺激障壁(<math>\alpha=.582</math>)</b>					
23 天候や騒音、臭気など不快な環境にある時、すぐイライラする。	-.033	.142	-.048	<b>.504</b>	.072
7 満員の電車やバスの中で、人と接触するのに耐え難くなることがよくある。	.002	-.064	.224	<b>.470</b>	.053
11 衣服の肌ざわりが悪いと、一日中気になって仕方がない。	.042	-.030	.037	<b>.367</b>	.163
3 物音が気になってなかなか寝つけなかったり、すぐ目が醒めるほうである。	-.006	.214	-.086	<b>.310</b>	-.013
<b>現実検討(<math>\alpha=.725</math>)</b>					
12 物事が現実起こったのか、自分の心の中だけで起こったのかどうか迷った経験がある。	-.003	-.142	-.043	.019	<b>.889</b>
4 今までに、ある物事が本当に起こったのか、夢だったのかわからなくて困ったことがある。	-.064	-.110	-.069	.068	<b>.747</b>
9 自分の身体が奇妙な感じがして自分のものではないような感じがする。	.214	.175	.114	-.134	<b>.399</b>
<b>因子得点には含まない</b>					
13 世界が崩壊していくような感じがする。	.194	.219	-.021	.065	.291
29 他人と話している時、ガラス戸をへだてているように感じることがある。	<b>.455</b>	<b>.386</b>	.058	-.206	.014
35 膚がよくかぶれたり、かゆくなったりする。	<b>.304</b>	.015	-.037	<b>.304</b>	-.052
19 しばしば原因のわからない頭痛がする。	.293	.118	-.045	.265	-.004
1 夢うつつの状態で歩き回っているような感じがする。	.255	.168	-.068	.155	.195
21 まわりの世界との接触をなくしたように感じることがある。	.292	.299	.088	.026	.081
34 人の集まっているところに行くのがおっくうである。	.193	-.038	<b>.473</b>	<b>.337</b>	-.141
15 部屋が明るいと感じにくい。	.025	.021	.055	.280	-.035
	f1	.577	.333	.419	.667
	f2		.421	.475	.611
	f3			.444	.374
	f4				.375

太字は因子負荷量.30以上、斜体は因子得点に含まない項目を示す。

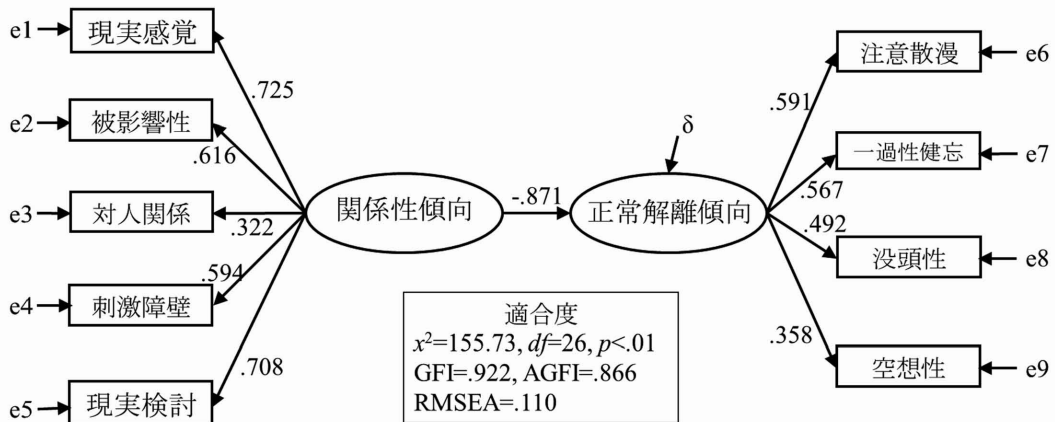


Fig.1 関係性傾向-正常解離傾向モデル

Table3  
DDS16得点と性別によるクロス集計

		性別		
		男性	女性	合計
DDS得点	低群	80	131	211
	高群	51	149	200
合計		131	280	411

Table4  
男女別のDDS16及びEFI-2下位因子記述統計量

	男性(n=131)				女性(n=280)				
	min	max	M	SD	min	max	M	SD	
DDS16	注意散漫性	6	30	15.57	4.48	6	30	16.41	5.19
	一過性健忘	4	20	12.40	3.49	4	20	13.23	3.47
	没頭性	2	10	5.57	2.22	2	10	5.17	2.17
	空想性	2	10	6.28	2.13	2	10	6.74	1.87
EFI-2	現実感覚	8	40	28.43	5.83	12	40	28.54	6.45
	被影響性	5	25	16.46	4.33	6	25	15.46	3.90
	対人関係	4	20	13.34	3.42	4	20	13.21	3.12
	刺激障壁	4	20	12.18	3.43	4	20	11.64	3.26
	現実検討	3	15	10.30	3.24	3	15	9.71	2.92

日常的解離尺度(中村, 2001)を因子分析(最尤法・プロマックス回転)したところ、注意散漫性・一過性健忘・没頭性・空想性の4因子が抽出された。この構造について確認的因子分析によって検討したところ、適合度も良好であった。しかし没頭性・空想性の項目は各々2項目のみであり、信頼性係数も低い値であったことから尺度の検討が必要であると思われる。

EFI-2の因子構造について

Table5  
男女別重回帰分析結果

	男性(n=131)				女性(n=280)			
	注意散漫	健忘	没頭性	空想性	注意散漫	健忘	没頭性	空想性
現実感覚	-.35***	n.s.	n.s.	n.s.	-.24***	n.s.	-.11***	n.s.
被影響性	n.s.	n.s.	n.s.	-.19***	n.s.	n.s.	n.s.	-.47***
対人関係	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	.26**	n.s.	-.08*	n.s.
刺激障壁	n.s.	n.s.	-.14*	n.s.	-.25*	-.15*	-.11**	n.s.
現実検討	-.26*	-.39***	-.16*	n.s.	-.31**	-.40***	n.s.	n.s.
<b>R<sup>2</sup></b>	<b>.34</b>	<b>.13</b>	<b>.12</b>	<b>.14</b>	<b>.22</b>	<b>.16</b>	<b>.20</b>	<b>.22</b>

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

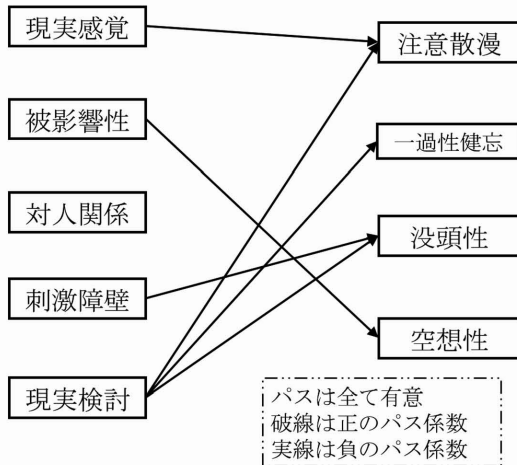


Fig. 2 男性のみのパス図

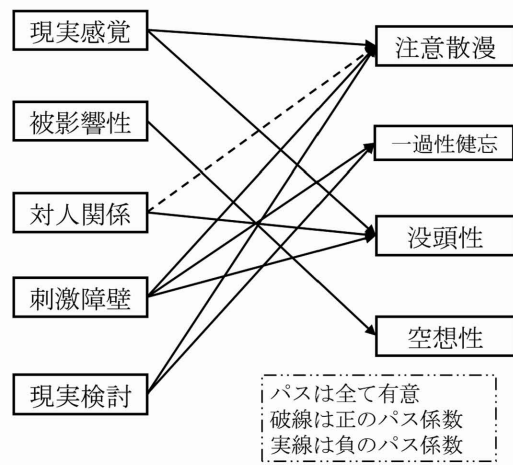


Fig. 3 女性のみのパス図

EFI-2はBellak et al.(1973)の考案した面接法による調査項目を中西・古市(1981)が目録法に作り直したものである。中西・古市(1981)は標準化の際、学生を対象として調査を行い、因子抽出のために主因子法・バリマックス回転による因子分析を行っている。しかし因子間が無相関であると想定し難い事、開発より30年が経過している事、調査対象が同一の大学生集団ではない事、EFI-2の因子の一部のみを使用している事という4点が問題点として考えられたため、確認的因子分析を行った。その結果適合度が低く、新たに最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析によると、中西・古市(1981)の4因子に収束せず、5因子解が妥当であるとの結論に至った。この相違は調査集団の相違や、調査時期の相違によって生起させられたものと推測される。また1つの尺度の下位因子の一部を使用した点も、この相違に寄与している可能性がある。以上の結果によって、心理学研究において頻繁に用いられる目録法、およびその下位尺度は継時的変化が生じている可能性が示唆される。既に開発されている尺度は定期的に、その構造や妥当性について検討する必要があると言える。

#### 関係性-解離の関連について

関係性の持ち方と解離傾向の関連を検討するために、共分散構造分析によってこの関連を検討し

たところ、 $\beta = -.871$  という強い関連が示された。モデル適合度も概ね良好であり、関係性の持ち方が解離へと影響を及ぼす可能性が示唆された。その結果、解離は希薄な関係性の持ち方と密接な関連があることが示された。ここから、正常解離であっても関係性の文脈から捉える事が可能であり、病的とは言い難い『解離的構え』も外界及び内界との希薄なつながりに関連する事が推察される。ただし解離傾向というパーソナリティ特性が、関係性傾向というパーソナリティ特性へと影響を及ぼしている可能性は否定できず、因果関係を結論付けることはできない。この点についてはより詳細で慎重な検討が必要である。

#### 性別による解離の下位機能と関係性の関連の相違について

$\chi^2$  検定の結果、Table3 における人数の分布に有意な差がみとめられた。さらに男女別の重回帰分析においては、異なったパス図が作成された。これらの結果より、解離の下位機能は異なる関係性の持ち方と関連することが示唆された。同時にその関連には性差が存在し、男女で異なる役割を持つ可能性が示唆された。解離の下位機能が異なる役割を持つとする先行研究(Giesbrecht et al., 2007; 舛田, 2008)では、主にストレスや対人関係場面に焦点を当てたものが多い。しかし本研究ではどのような関係性が解離へと影響を及ぼすのかを目的とした。その結果、男性では対人関係がどの解離の下位機能とも関連しないことが明らかとなった。このことから、男性における解離は対人関係場面における対処方略としては機能していない可能性が示唆される。一方女性では、対人関係が注意散漫性と没頭性に関連していることが示された。更にこの関連は、注意散漫性と対人関係では負の関連、没頭性と対人関係では正の関連がみとめられた。ここから女性が対人関係の変化によって解離の下位機能を柔軟に切り替えて用いていると思われる。

$\chi^2$  検定の結果、女性の方が男性よりも高い解離傾向を持ちやすい事が示唆された。重回帰分析では、女性の方が男性よりも有意な  $\beta$  係数が多かった。女性が低い解離傾向を持ちやすい一因として、この有意な  $\beta$  係数の多さ(Fig.3 における有意なパスの多さ)が寄与していると思われる。つまり、有意なパスの多さは関係性の変化に伴う解離への影響が敏感であることを示し、女性は関係性の変化によって男性よりも容易に解離を引き起こす可能性が推測される。

一方、周囲からの影響の受けやすさ(被影響性)は、性別に関わらず空想性とのみ関連していた。ここから、影響の受けやすさは被暗示性とも関連が予想され、空想性が被暗示性と関連が深い概念であることが推測される。

#### 総合考察

以上の結果を踏まえると、解離傾向と解離性障害における性差のギャップについて、以下のよう  
に述べることができるだろう。先行研究(e.g. 田辺, 1994)において、解離傾向に性差はないとされて  
いるが、これは DES によって測定された解離傾向である。中村(2001)も DES が Bernstein, & Putnam  
(1986)の臨床経験に裏付けられたものであり、解離の正常な側面を測定できているのか疑問が残る  
と指摘しているように、DES が解離の正常な側面を測定しているとは言い難い。本来、DES は DID  
の鑑別に用いる事を目的として作成されており(Bernstein, & Putnam, 1986)、解離傾向を測定する上  
で用いることは想定されていなかった。一方 DDS16 は非臨床群における解離の正常な側面を測定す  
るために作成されたものであり、より正常解離を測定することに特化した尺度であると言えるだろ

う。そのため、先行研究ではみとめられなかった解離傾向の性差が、本研究でみとめられた可能性、すなわち尺度の違いによって性差がみとめられた可能性がある。今後は、解離を測定する複数の尺度を使用して、それらの関連を検討する必要があるだろう。

次に、男女間の解離傾向と関係性の関連について検討する。上述のように、解離と関係性の持ち方の間には、性別によって相違がみとめられた。男性の特徴は対人関係が解離傾向と関連が無い点であり、男性の解離の機能は対人関係の変化には反応しない可能性が窺われる。また女性と比較して有意なパスが少なく、女性よりも解離が生じ辛いことが予想される。更に重回帰分析の結果、男性は現実検討能力の低下が没頭を引き起こす可能性があることが明らかになった。これは男性のみにみとめられた関係性と解離の関連である。一般的に、現実検討能力の低下は精神病理の一因とされているが、解離における没頭は逆にストレスを低減する機能であることが明らかになっている (Giesbrecht et al., 2007)。現実検討能力の低下によって引き起こされる没頭性の上昇はストレス反応を弱め、男性を精神病理の発現から保護している可能性がある。一方女性では、重回帰分析の結果、現実感覚の低下によって没頭が引き起こされるものの、対人関係が悪化した場合、没頭機能が抑制される可能性が示唆された。対人関係上の問題は Simeon et al. (2001) が指摘しているように、病的な解離を引き起こす一因である。この病的な解離を引き起こす対人関係の悪化が、適応的な解離の機能である没頭を抑制するという事は、解離が病理を帯びるような状況に於いて、抑制する要素が少ないことを示唆している。更に女性は男性と比較して関係性から解離への有意なパスが多い。つまり関係性の次元で何らかの変化が生じた場合、解離の下位機能へと、その影響が拡散しやすい傾向があると考えられる。以上のような性差によって、女性は解離しやすく、また病理を帯びた解離すなわち病的解離へと展開しやすいことが推察される。

### 本研究の限界

本研究は大学生を対象として行ったものであり、ただちに一般化することは困難であろう。一般化に向け、多くの年齢層や階層に向けて調査を行う必要がある。さらに性差についても、本研究では調査協力者への負担を考慮して社会的性を問うような尺度を使用せず、『男性・女性』どちらかの選択を求める方法が採られた。しかし本研究でみとめられた性差が生物学的性によるものなのか、社会的性によるものなのかは明らかではない。従って性差をより詳細に検討する上で、生物学的性と社会的性を区別した研究デザインによる調査が必要である。また解離を引き起こす原因は虐待や外傷体験などの環境因と、レジリエンスや空想性などの個人要因の存在が予想される。本研究で扱った関係性とは、環境因と個人因の境界領域に位置するインターフェースのような存在である。解離と関係性の関連は概ね良好であり、関係性の持ち方が解離へと強力な影響( $\beta = -.871$ )を与えていたため、今後は環境因および個人因が解離とどのような関連を持つのかをさらに詳細な検討が必要であろう。

### 引用文献

American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: Text Revision*. New York: American Psychiatric Publishing.

- (高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸(訳) (2004). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル新訂版 医学書院)
- 馬場謙一・鈴木朋子・竹内理英・松本京介・長谷川麻衣子 (2000). 自我機能の発達と病態化の研究 (その1) 放送大学研究年報, **18**, 1-10.
- Bellak, L., Hurvich, M., & Gediman, H. (1973). *Ego function in Schizophrenics, Neurotics, Normals*. New York: Wiley.
- Bernstein, E. M., & Putnam, F. W. (1986). Development, reliability, and validity of a dissociation scale. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**, 727-735.
- Brand, B. L., Armstrong, J. G., Loewenstein, R. J., & McNary, S. W. (2009). Personality differences on the rorschach of dissociative identity disorder, borderline personality disorder, and psychotic inpatients. *Psychological Trauma. Theory, Research, Practice, and Policy*, **1**, 188-205.
- Friedl, M. C., & Draijer, N. (2000). Dissociative disorders in dutch psychiatric inpatients. *The American Journal of Psychiatry*, **157**, 1012-1013.
- Giesbrecht, T., Smeets, T., Merckelbach, H., & Jelicic, M. (2007). Depersonalization experiences in undergraduates are related to heightened stress cortisol responses. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **195**, 282-287.
- Hilgard, E. R. (1986). *Divided Consciousness*. Canada: Wiley.
- 細澤 仁(2001). 解離性同一性障害の精神療法 ——終結 3 例を通して—— 思春期青年期精神医学, **11**, 89-98.
- 福島 章 (1989). 性格と不適応 福島章(編) 性格心理学 新講座. 3 適応と不適応 金子書房 3-37.
- 岩宮恵子 (2009). ツーの子の思春期 心理療法の現場から 岩波書店.
- 兼本浩祐・多羅尾陽子 (2007). 解離という言葉とその裾野——「リスカ」「OD」「プチ解離」 精神科治療学, **22**, 269-274.
- 木村 敏 (1978). 自覚の精神病理<新装版> 紀伊國屋書店.
- 木村 敏 (2006). 自己・あいだ・時間 現象学的精神病理学 筑摩書房.
- Landis, B. (1970). *Ego Boundaries*. New York: International Universities Press, Ink.
- (ランディス, B. 馬場禮子・小出れい子(訳) (1981). 自我境界(現代精神分析双書 II-7) 岩崎学術出版社)
- Lewis, D. O., Yeager, C. A., Swica, Y., Pincus, J. H., & Lewis, M. (1997). Objective documentation of child abuse and dissociation in 12 murderers with dissociation identity disorder. *American Journal of Psychiatry*, **154**, 1703-1710.
- Ludwig, A. M. (1983). The psychobiological function of dissociation. *American Journal of Clinical Hipnosis*, **26**, 93-99.
- 舛田亮太・中村俊哉 (2005). 日常的解離尺度(短縮6項目版), 日常的分割投影尺度(短縮8項目版)の構成概念妥当性の検討 パーソナリティ研究, **13**, 208-219.

- 舛田亮太 (2006). 日常的解離尺度(短縮版)における弁別的妥当性と項目内容の検討——分割投影, 離人感との関連性について——九州大学心理学研究, **7**, 117-123.
- 舛田亮太 (2008). 青年期における日常的解離に関する調査研究 日常的解離, 日常的離人との弁別モデルについて 心理臨床学研究, **26**, 84-96.
- 松下姫歌 (2000). 青年期の離人感に関する研究 心理臨床学研究, **18**, 243-253.
- Mattim, H., Pirkko, S., & Viikko, A. (1999). Defense style explain psychiatric symptom. an empirical study. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **187**, 654-660.
- 中村俊哉 (2003). 解離と分割についての覚書——日常的な解離尺度, 空想対話尺度, 日常的な分割投影尺度の作成 福岡教育大学紀要, **52**, 213-226.
- 中西信男・古市裕一 (1981). 自我機能に関する心理学的研究—自我機能調査票の開発—大阪大学人間科学部紀要, **7**, 189-220.
- 中谷陽二 (2000). 解離性障害——ジャネから DSM-IV まで——精神神経学雑誌, **102**, 1-12.
- Nijenhuis, E. R. S., Spinhoven, P., Dyck, R. V., Van der Hart, O., & Vanderlinden, J. (1996). The development and psychometric characteristics of the somatiform dissociation questionnaire(SDQ-20). *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **184**, 688-694.
- 野口寿一 (2007). 自己関係性の視点から見た解離 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 85-97.
- 岡野憲一郎 (2007). 解離性障害—多重人格の理解と治療 岩崎学術出版社.
- 大山俊男 (2003). 自我境界と対人不安 大東文化大学紀要, **41**, 51-59.
- Putnam, F. W. (1997). *Dissociation in Children and Adolescents: A Developmental Perspective*. New York: Guilford Press.
- (パトナム, F. W. 中井久夫(訳) (2001). 解離 若年期における病理と治療 みすず書房)
- Roesler, T. A., & Nancy McKenzie, R. N. (1994). Effects of childhood trauma on psychological functioning in adults sexually abused as children. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **182**, 145-150.
- Sierra, M., Senior, C., Dalton, J., McDonough, M., Bond, A., Phillips, M. L., O'Dwyer, A. M., & David, A. S. (2002). Autonomic response in depersonalization disorder. *Archives of General Psychiatry*, **59**, 833-838.
- Simeon, D., Guralnik, O., Sirof, B., & Knutelska, M. (2001). The role of childhood interpersonal trauma in depersonalization disorder. *American Journal of Psychiatry*, **158**, 1027-1033.
- Simeon, D., Guralnik, O., Knutelska, M., & Schmeidler, J. (2002). Personality factors associated with dissociation . temperament, defenses, and cognitive schemata. *American Journal of Psychiatry*, **159**, 489-491.
- 田辺 肇 (1994). 解離性障害と心的外傷体験の関連 催眠学研究, **39**, 1-10.
- 田辺 肇 (2002). 解離現象 下山晴彦・丹野義彦(編) 講座臨床心理学 3. 異常心理学 I 東京大学出版会 161-182.
- Teicher, M. H., Samson, J. A., Polcari, A., & McGreenery, C. E. (2006). Sticks, stones, and hurtful words. relative effects of various forms of childhood maltreatment. *American Journal of Psychiatry*, **163**,

993-1000.

Tutkun, H., Şar, V., Yargıç, L. I., Özpulat, T., Yanik, M., & Kiziltan, E. (1998). Frequency of dissociative disorders among psychiatric inpatients in Turkish university clinic. *American Journal of Psychiatry*, **155**, 800-805.

#### 謝辞

本研究は、2010年度に京都文教大学臨床心理学部臨床心理学科へ卒業論文として提出されたものに、加筆修正を施したものです。調査のために貴重な時間を割いて下さいました調査協力者・調査補助の皆様、本研究に多大なる示唆と御指導を下さいました高石浩一教授に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。